

結束性と過程としてのテキスト*

佐藤勝之

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

Cohesion and Text as Process

Katsuyuki Sato

*Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

Abstract

Cohesion was proposed by Halliday & Hasan (1976) as a major means for achieving texture in texts of various kinds and it has contributed much to the understanding of the complexities of the linking relations of words and phrases that appear in (or are fully recoverable from) a text. It is, however, discussed only in terms of the surface of a text, and the rest of the problem of texture, the implicit aspects of it, are to be dealt with by means other than cohesion.

By confining the problem to the legible surface, there arise cases where readers can find no cohesion of reference on the surface but they still intuitively perceive coherence in the text.

I will offer several such examples and concentrate on co-referentiality, then I argue that the inconsistency can be dispelled by extending the function of cohesion into the level of recognition. In this solution, I apply the notions of case relation and conceptualization.

1. 序 論

近年発達著しい認知心理学の影響の下に、言語を人間の認知的活動の1つと見なし、テキストないし談話をこうした活動の過程(process)であるとする見方が言語学の1つの主要な見方になりつつある。

まず、Beaugrande(1985)によれば、テキスト分析にたずさわる人々の間で、「テキストはコミュニケーションの場における自然な言語の生起と定義すべきだ」というコンセンサスが生まれている」(p.47)と言う。同じ思想的流れにある Fillmore(1985)は、言語を研究するに当たって「過程に注目することが不可欠である、とくに、言語活動の所産を時間とともに展開していくものと見なすことで、従来の言語学の諸概念を組み替える必要がある」(p.15)と主張している。

BeaugrandeやFillmoreと同様の考え方をしているBrown & Yule(1983)の見解では、「テキストに現れる語句や文は、作り手(話し手/書き手)が受け手(聞き手/読み手)にメッセージを伝達する試みが形になったものであると考えられ、こうした[談話を過程と見なす]見方によれば、言語の伝達機能がその探求すべき第一の領域であり、言語形式は静的なものではなく、意図された意味を表現するダイナミックな手段である」(p.24)と捉えられることになる。

独自の機能主義文法理論を組み立てているHallidayは、常に言語をその使用(use)の側面から捉えているが、テキストを過程の面から見る場合でも、範列的な「選択体系」(system)から始めなければならないと主張する(1985/1994: xxii)。

ところで、1976年にHallidayがHasanとともに提示した「結束性」(cohesion)は、この選択体系が果たす3つのメタ機能のうちのテキスト的メタ機能(textual metafunction)が、連辞的なテキストの上で作用しているもの

の1つであると捉えられる(Halliday 1985/1994: ch.9). Halliday & Hasan(1976)によれば、結束性とは、「ある要素の解釈を別の要素に依存させることによって構造的には関連しない要素同士を結び付け」(p.27)、「テキスト性(texture)を達成する言語的手段」(p.293)なのである。

次節では、これら過程としてテキストを捉える見方を踏まえて、テキスト性とは何か考え直してみたい。

2. テキスト性

われわれが文の連鎖をテキストとして理解するという事は、これを独立した文の単なる連続としてではなく、「まとまりのある全体」(configuration)として捉えることだと考えてみよう。このことを具体的に検討するために、「へのへのもへじ」を例に挙げてみる。

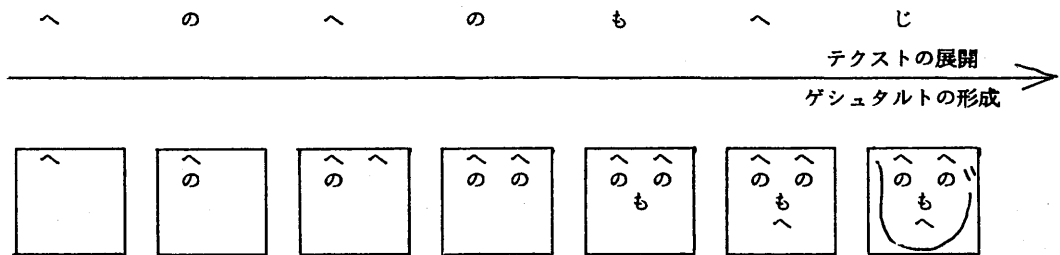


図1 テキストの展開に伴うゲシュタルトの形成

この極めて短いテキストを読み終えたときに得られるものは、最後の文字「じ」でもなく、直線的に配列された単なる文字列でもなくて、人の顔の形をした1つのゲシュタルトである。これは、読み手あるいは聞き手が、時間軸に沿って展開するテキストの情報を念頭に集め、これが呼び起こす既知の文化的知識と照合しながら文字列を再構成した結果であると言える。¹

もちろん、テキストの理解というものが、常にこのような手順と型を示すと断言はできない——特に、言うまでもないことだが、概念形成が必ずしも視覚的な表示をもつわけではない——が、この図式によってテキストの理解という行為についてのきわめて一般的な解釈を提示しえると思う。

3. テキストにおける指示

前節では、過程としてテキストを捉えるということは、テキストを単に時間的に経過するものとして捉えることではなく、時間軸上の展開に伴って増大する情報が読み手あるいは聞き手において集積され、全体的な意味づけが行われるものとして捉えることだと考えられることを、象徴的な図式によって示した。以下では、この基本的なアプローチから、テキストにおける指示(reference)の問題に焦点を絞って、Halliday および Halliday & Hasanの主張を批判的に検討しながら、さらに考えを進めていくことにしよう。

(1) Wash and core six cooking apples. Put them into a fireproof dish. (Halliday & Hasan 1976: 2)

(1)のミニテキストは、Halliday & Hasanが、結束性とはどのようなものかを説明するために最初に挙げた例だが、彼らによれば、第2文のthemは、(テキスト内照応的に用いられていれば、)直前の文のsix cooking applesを指しており、これら2つの名詞句は指示の上で同一だと言う。確かに、テキストの表層に関する限り、この認識は全く妥当と思われるし、その妥当性は、「照応的指示の概念のおおもとには、代用の原理(principle of substitution)がある」というLyons(1977: 659)の一般的な認識によっても裏付けられるだろう。

しかし問題が、テキストが表象する世界ないしテキストを通してわれわれが認識する世界に関してどうかということになると、今とは同じことが言えなくなる。つまり第1文のsix cooking applesは、「不特定の6個の料理用りんご」というだけだが、washとcoreという(Langacker(1991)らの言う意味での)「他動性」(transitivity)の大きい動詞が担う意味内容の影響を被ったあとのthemは、言葉で言い表せば、the six cooking apples that have been washed and coredすなわち、「洗って芯を抜かれた特定の6個の料理用りんご」になる。² Brown & Yule(1983)は、正にこの例を挙げて、「6つの料理用りんごは状態の変化を被っている」、そして、「読み手がこ

れを理解するために、代用の原理に基づいて解釈することはありそうにない」(p.201)と適切に指摘している。³
 このことをさらにもう少し長いテキストで確かめてみよう。

- (2) Good tea deserves the very best treatment. Warm the teapot before putting in one teaspoonful for each person and one for the pot. Bring fresh water to the boil and pour it₁ immediately. If you allow it₂ to stand for five minutes, you will then enjoy the distinctive character and flavour of this choice tea.

(Twinings Tea: directions)

例(2)は、紅茶の缶の側面に記してあった紅茶の入れ方の指示書である。ここで it₁ が指すものは何かと問われれば、文脈を溯って見出した単数名詞 fresh water がそれであると答えて、『文法的に』何ら誤りとは言えない。問題は、it₁ の代わりに fresh water を入れてみて話の筋が通るかどうか考えると、大きな誤解を生じてしまうという点である。と言うのは、it₁ の概念内容は、「fresh water を沸騰させたもの」であって、「汲みたての fresh water」ではない。同様に、it₂ は、「fresh water を沸騰させたものを、直ちに、適当な量の茶葉の入った、あらかじめ温めておいたティーポットに注いだもの」という内容になる。(このテキストについては第5節でさらに論じる。)

ところで、(1)のレシピ(の一部)や(2)の指示書のような一連の「手続き」(procedure)を示すテキストは、「他動性の大きい動詞の命令形+直接目的語」のパターンを繰り返す形式になっているが、大事な点は、読み手に動詞の意味内容の実現を命じる命令文だから目的語の指示物の変容が生じるのではなくて、他動性の大きい述語動詞であれば、平叙文であっても同様の変容を示すということである。次の例で、このことを確認しよう。

- (3) Farmers cut hay in June, drying it₁ in the sun before storing it₂ in barns until it₃ is needed for food for animals in winter.

Halliday & Hasan の言うように、it₃ は、it₂、it₁ へと溯及して hay を指示するわけだが、(1)や(2)の例について考えたのと同様に、先行文脈の情報を処理した上での it₁ はもはやただの hay ではなくて、「農夫たちが6月に刈り取った hay」であり、it₂ は「刈り取って日に干した hay」であり、さらに it₃ は「日に干した後納屋に蓄えた hay」なのである。

要するに、読み手によるテキストの解釈という観点からする限り、「他動性の大きい動詞+直接目的語」という述部のパターンは、平叙文であろうと命令文であろうと、動詞の意味作用による目的語の指示対象の変化を常にもたらすのである。換言すれば、例えば「peel an orange」の心的表示は、この表現が遂行文の形で現れようと(“Peel an orange!”)、現れまいと(“He peeled an orange.”)、変わらないということである。

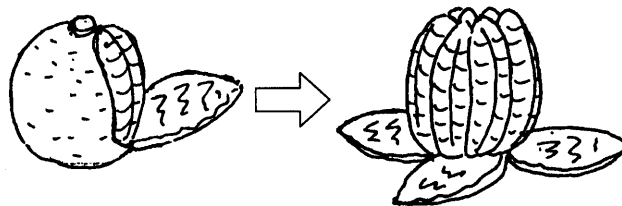


図2 《peel an orange》の概念的表示

さて、こうした「指示対象の変容」は認めたところで、これが結束性とどう関係するのか、それは表層の結束関係について問題にならないのではないかと反駁される恐れがあるので、実際大きな問題になることを例によって示そうと思う。

次のテキストは、幼い息子が何をしているのかと背後から様子を伺っている母親の独り言と思ってほしい。

- (4) He's putting some pieces together ... Oh, it's a model car.

母親は何かを作られつつあるのを目撃していて、それが何であるのか分かったときに第2文を発したと考えられるので、ここで it はあたかもテキスト外照応的に振る舞っているように見えるが、it は、that とは異なり本来的

(10) John made pudding.

make
(ingredients) \Longrightarrow pudding

(11) Farmers cut hay in June.

cut
(grass) \Longrightarrow hay (cut in June)

問題にしたいことは、単に1つの節が、これを構成する目的語の変容を含蓄しているということではなくて、手続きのテキストにあっては、後続する節の目的語が、前方照応で「同一指示」(coreferential)の場合、先行する節で変化した結果の様態をその表示内容として持っているということである。(その意味で、形式上の「同一指示」は、概念上は同一指示にならない。)しかも、これは何度でも繰り返される「埋め込み構造」を成す。これを処理型の物質的過程に関して公式化すると次のようになる(公式の角括弧は、括弧の内部が外部より先に『演算』されることを示す):

(12)

$$\begin{array}{ccc} & V_1 & \\ O & \Longrightarrow & O \cdot V_1\text{-en} \\ & V_2 & \\ O \cdot V_1\text{-en} & \Longrightarrow & [O \cdot V_1\text{-en}] \cdot V_2\text{-en} \\ & V_3 & \\ [O \cdot V_1\text{-en}] \cdot V_2\text{-en} & \Longrightarrow & [[O \cdot V_1\text{-en}] \cdot V_2\text{-en}] \cdot V_3\text{-en} \end{array}$$

これを先の例(3)を再び用いて具体的に示す。(説明の便宜のため各節(いわゆる非定形節を含む)にローマ数字で番号を付す。)ただし最初の節は創造型の過程である:

(13) (i)Farmers cut hay in June, (ii)drying it₁ in the sun (iii)before storing it₂ in barns ...

(i) $\begin{array}{ccc} & \text{cut} & \\ (\text{grass}) & \Longrightarrow & \text{hay cut in June} \end{array}$

(ii) $\begin{array}{ccc} & \text{dry} & \\ \text{hay cut in June (=it}_1) & \Longrightarrow & [\text{hay cut in June}] \text{dried in the sun} \end{array}$

(iii) $\begin{array}{ccc} & \text{store} & \\ [\text{hay cut in June}] \text{dried in the sun (=it}_2) & \Longrightarrow & [[\text{hay cut in June}] \text{dried in the sun}] \\ & & \text{stored in barns} \end{array}$

この埋め込み構造とテキストの展開との関係は次節でさらに検討する。

5. 結束性と一貫性

それでは先のテキスト例(2)を改めて吟味しようと思う。この紅茶の入れ方を指南するテキストは、Hoey (1983)のテキストの構造分析を参考すると、まず1)「問題」(Problem)として、実際に紅茶を入れるに際しての予備的説明、次に2)「反応」(Response)として、具体的に紅茶を入れる手続き、最後に3)一連の行為の結果の「評価」(Evaluation)の3つの部分から成り立っているものと見なせる。ここで注目したいのは、主要部分である2)「手続き」の述語動詞がいずれも、目的語に影響を与え変化をもたらす他動性の大きい物質的動詞になっていることである。

さらに、これら一連の動詞は、それぞれの目的語に個別に働きかけるものではなく、相互に関連する複数の目的語に継時的に働きかけるものである。したがってこのテキストの主要部分には、これらの目的語をトピックとする連続性ないし一貫性(coherence)が存在する。このことをより認識しやすくするために、テキストの省略部分を補うことによって次のように書き換えよう:

(14) (i)Good tea deserves the very best treatment. (ii)Warm the teapot (iii)before putting in [the teapot] one teaspoonful [tealeaf] for each person and one [teaspoonful tealeaf] for the pot.

(iv) Bring fresh water to the boil (v) and pour it [into the teapot] immediately. (vi) If you allow it to stand for five minutes, (vii) you will then enjoy the distinctive character and flavour of this choice tea.

このトピックの連続性は、テキストの表層では代名詞によって保証されるが(fresh water ... it ... it), 省略されたゼロ形態の語句によっても暗示されていることを忘れてはならない(角括弧内の語句の同一指示性を参照).

次に示すのは、各節における目的語の様態の変化 — 正確には、目的語が指示する言語外の指示対象ないし心の表象の様態の変化 — である。(テキストの表面には現れていないものも含めて考える.) なお、複数のトピックが述語動詞にたいして持つ意味上の相互関係を表示するために「格関係」(case relation)の概念を用いる。(ここで用いている用語は Fillmore (1971)による. 4)

- (15) (ii) warm the teapot(=teapot prepared)[O=Object]
 - ====> warmed teapot[G=Goal(=Resultative)]
- (iii) put in the teapot(=warmed teapot)[L=Locative] tealeaf[O]
 - ====> tealeaf put in the warmed teapot=warmed teapot with tealeaf[G]
- (iv) bring fresh water[O] to the boil ====> boiled water[G]
- (v) pour it(=boiled water)[O] into the teapot(=warmed teapot with tealeaf)[L] immediately
 - ====> boiled water poured in the warmed teapot with tealeaf =boiled water mixed with tealeaf in the warmed teapot[G]
- (vi) allow it(=boiled water mixed with tealeaf in the warmed teapot)[O]
 - to stand for five minutes
 - ====> boiled water mixed with tealeaf in the warmed teapot left for five minutes =tea ready to be served[G]

さらにこれらを、テキストの表層に関して結束関係の1つの現れである「指示の連鎖」を応用しながらもう一度整理すると、次のような図式になる:

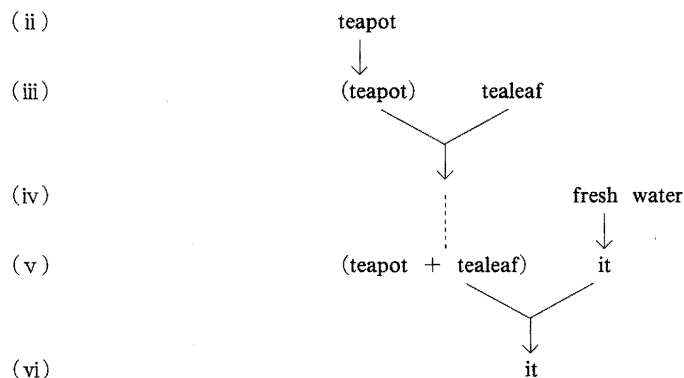


図3 テキスト例(14)におけるトピックの展開

この図式によって、テキストにおける照応関係が単純に「代用」によるものではなく、先行するテキストの情報の累積と集約を伴うこと、さらに、集約された情報がトピックの一貫した展開に従って再構成されることが明らかになると思う。

6. 結 論

本論では、まず、テキストを静的な構成体ではなく、動的な伝達手段と見なす考え方に基づいて、テキストの継時的な展開に伴ってその情報が集積され、結果として何らかの意味的なまとまりを生じることを例により示し

結束性と過程としてのテキスト (1)

た。そして、このことが、テキスト上の「結束性」を捉える上で不可欠であること、とりわけ「手続き」テキストにあっては、先行する節の「過程の所産」が後続する節を解釈する上で決定的に重要であることを指摘し、さらに、この見方が、複数のトピックが相互に関係するテキストの構造の解釈に関してもきわめて重要な要因になることを併せて主張した。

今後の問題として、この基本的な考え方が「手続き」のテキストに止まらず、他の多くの種類のテキストに適用できるかどうか、適用できるとすればどのような修正や条件が必要になるのかよく検討したい。

注

*本稿は機能言語学会第3回例会(1994年11月11日 於 桜美林大学)における発表を修正したものである。

- 1 このテキストは次の3点で特殊なテキストである: 1) テキスト全体が1つの情報単位(information unit; Halliday 1985/1994: ch.8)から成り立っている; 2) 統語法を欠いている; 3) テキスト構成単位である文字がそのままテキストの意味表示の構成要素になっている。しかし、ここでこれを利用するのは、図式的にきわめて明快だからである。
- 2 いわゆる認知文法の視点から、Croft(1991: ch.4)とLangacker(1991: ch.7)は、他動性についてより進んだ議論を展開している。とくにCroftは、他動性の大きい動詞によって引き起こされる「対象の変化」(change of object)の概念を持ち込んでいる点で非常に示唆的である。
- 3 しかし、残念ながらBrown & Yule(1983)はこれについての議論をこれ以上進めていない。
- 4 格関係の概念は、言語的に表現されている語句についてそれらの意味上の相互関係を示すために用いられるのだが、ここではそれを潜在的な要素の表示に拡大適用する。

引用・参考文献

- Beaugrande, Robert de. 'Text Linguistics in Discourse Studies'. In T. A. Van Dijk, (ed.), *Handbook of Discourse Analysis*, Vol. 1, New York: Academic Press, pp. 41-70. (1985).
- Brown, Gillian and George Yule, *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press. (1983).
- Croft, William. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: The University of Chicago Press. (1991).
- Fillmore, Charles, J. 'Some Problems for Case Grammar'. In R. J. O'Brien, (ed.), *Monograph Series on Language and Linguistics* 24, Washington, D. C.: George Town University Press, pp.35-56. (1971).
- Fillmore, Charles J. 'Linguistics as a Tool for Discourse Analysis'. In T. A. Van Dijk, (ed.), *Handbook of Discourse Analysis*, Vol. 1, London: Academic Press, pp. 11-39. (1985).
- Halliday, M. A. K. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. (1985/1994).
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan, *Cohesion in English*. London: Longman. (1976).
- Hoey, Michael. *On the Surface of Discourse*. London: George Allen & Unwin. (1983).
- Langacker, R. W. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2. Stanford: Stanford University Press. (1991).
- Lyons, John. *Semantics*, Vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press. (1977).
- Martin, J. R. *English Text*. Amsterdam: John Benjamins. (1992).